ポスターNo.A5　　**実践発表**

日本語を学ぶ子どもたちと大学生による写真展を通したつながりづくり

―公立図書館と小学校、家庭、大学による実践共同体形成の可能性―

髙橋　美奈子（琉球大学）

１．実践の場の特徴

本実践は、将来小学校教員を志す大学 2 年生 7 名が、2026 年 5 月から 8 月まで、公立小学校の日本語教室に通級する児童を対象に、実習を取り入れた演習科目の一環として行った最終実践である。大学生は、学級や日本語教室での学習支援に加え、大学での振り返りや議論、教員による指導を通して、子どもたちを「日本語の支援が必要な児童」としてだけでなく、多様な経験や能力を持つ存在として捉えるようになった。一方、子どもたちの豊かな経験や思いを、学校や地域の人々と共有する機会は限られていた。

また、子どもを取り巻く図書館、学校、地域にもそれぞれ異なる課題があった。公立図書館では、日頃から子どもの利用者が少なく、学校との連携も社会科の「町探検」の授業の一環で図書館を訪れる活動に限られていた。図書館司書は学校司書教諭経験も有しており、校区内の学校事情や教員の多忙さを理解しているため、図書館側から学校にイベント等の協力をもちかけることにも難しさがあった。小学校では、多くの子どもや業務を抱える中で、日本語教室に通級する子どもたちの強みに着目した新たな活動を設定することが容易ではなかった。さらに、地域住民にとっても、外国につながる子どもたちの生活や文化に直接触れる機会は限られていた。

そこで、子どもたちの豊かな生活や経験を学校・地域住民と共有するとともに、図書館を子どもたちと学校・地域をつなぐ場として活用するため、図書館で写真展を開催することとした。写真展では、子どもたち自身の写真とことばによって「子どもたちが見ている世界」を地域にひらき、その思いや考えに触れる機会をつくることを目指した。

２．実践の目標と方法

上述した課題を踏まえ、本実践では、子ども、大学生、学校、図書館をそれぞれ実践の主体として、①子どもが自分の生活や背景を写真とことばで表現し、それを他者に伝えるとともに、写真に関連する本に親しむことで、ことばを育む機会をつくること、②子どもたちの多様な言語的・文化的背景を地域や学校と共有すること、③大学生が子どもの多様な姿を捉え直し、「教える側／教えられる側」に固定されない関係を経験すること、④図書館・小学校・家庭・大学を、子どもを介してつなぎ、図書館を含む地域との新たな接点をつくること、の 4 点を目標とした。

実践では、まず小学校と家庭の協力を得て参加を募り、13 名の児童から、好きな場所や遊び、家族との時間、宝物など、「他者に伝えたい」写真の提供をしてもらった。小学校での日本語支援の時間には、大学生が写真を手がかりに、「どこで撮ったのか」「なぜこの写真を選んだのか」などを子どもに尋ね、写真に込めた思いを聞き取った。その上で、子どもが伝えたい内容を生かしながら、日本語を母語としない来場者にも伝わる題名や説明文を、子どもとともに考えた。

さらに、図書館司書と大学生が写真の内容に関連する絵本を選び、写真、写真の説明文、絵本を組み合わせて展示した。来場者には、子どもと大学生へのメッセージを記入したコメントシートを「コイン」として宝箱に入れてもらう仕組みを設け、写真を一方的に見てもらうだけでなく、来場者のことばやイラストが、子どもと大学生にフィードバックされるよう工夫した。

３．実践の過程における参加者の学び

写真展は１ヶ月間の準備期間を経て１週間開催し、そのうち土日の２日間は大学生が会場に常駐した。地元紙で周知したこともあり、学校関係者や保護者、地域住民など多くの来場者があり、結果として 84 件のコメントが寄せられた。会場では、写真を提供した子どもが家族とともに来場し、自分の提供した写真や日本語教室で学んでいる様子を写した写真を指しながら、家族や来場者に自分が使えることばで説明する姿が見られた。こうした子どもたちの姿に対して、大学生からは、「子どもたちが自分の言葉で自慢げに写真の説明をしていたのを見て嬉しかった」との振り返りが得られた。さらに、写真に関連する図書を設置したことで、大学生と子どもが絵本を楽しむ姿や、大学生が様々な言語を用いて子どもの保護者と交流する様子も見られた。大学生にとっては、学校での学習支援場面とは異なる子どもたちの姿に触れることで、子どもたちを日本語の支援を受ける存在としてだけでなく、自らの経験を他者に伝え、周囲の人々と多様なことばで関わる主体として、改めて捉える機会になった。

また、訪れた子どもの担任などの学校関係者からは、「子どもたちの意外な一面が見れてよかった」「普段学校で知っている子達の見ている世界を写真という形で見れて楽しかった」「子どもたちのなにげない日々のキラキラがとてもよくわかりました」「みんなが自分らしく成長していてとても嬉しかった」などの声が寄せられた。これらのコメントから、学校関係者が、学校で日常的に接している子どもたちの生活や経験を、写真を通して改めて知る機会となったことがうかがえる。さらに、子どもの保護者からも、普段知ることが難しい自分の子どもの友達のことや、日本語教室で子どもが頑張っている様子を、写真を通して知ることができたとの感想が得られた。

４．目標の達成度と考察

以上の記録から、子どもにとっては自分の生活や背景を写真とことばで表現し、それを家族や地域の人に伝える機会が生まれたこと、また、写真に関連する絵本を大学生と楽しむ姿も見られたことから、ことばや本に触れる場をつくるという①の目標の達成につながったと考える。②については、学校や地域住民にとって、普段とは異なる角度から子どもたちの生活や文化を知る機会となり、コメントの中にも「海外への先入観がほぐれ、親近感が湧いた」「言語を超えたつながりの大切さを実感した」など、子どもたちの生活や文化への理解の広がりを示す記述が見られたことから、一定の成果が得られたと考える。③については、大学生が子どもと写真の説明文を協働してつくる中で、「私たちが教えて支えるだけでなく、子どもから母国の文化や学校への見方など教えてもらうことが多くあった」と振り返っており、子どもから学ぶという視点を得たことで、子どもとの関係を捉え直す学びにつながったと考える。④についても、学校関係者、保護者、大学生、子どもが同じ写真を媒介に交流し、普段公共図書館を利用する機会が少ない子どもや外国人保護者が来館する契機となったことから、図書館を起点とした新たな接点が生まれたといえる。

ただし、今回生まれたつながりは、大人と子ども、あるいは大人同士の交流が中心であり、子ども同士が写真やことばを通して交流する機会は十分ではなかった。また、複数の機関が協働したことのみをもって「実践共同体」の形成とは言えず、共同体として捉えるには、継続的な実践と蓄積が必要である。今後は、小学校でも写真展を開催し、子ども同士が互いの写真について質問したり、自分の経験を語ったりする場を設ける。その過程で、子ども、大学生、学校、家庭、図書館それぞれがどのように実践に参加し、互いの学びや関係がどのように変化するのかを継続的に記録・分析することで、多文化共生に向けた実践共同体形成の可能性を検討したい。

付記：本発表には、JSPS 科学研究費 JP26K04048 の助成を受けた研究の成果の一部を含む。